

氏名	竹 林 秀 雄
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第 号
学位授与の日付	平成16年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Immediate and 3-month Follow-Up Outcome After Cutting Balloon Angioplasty for Bifurcation Lesions (分岐部病変に対するCutting Balloon Angioplastyの直後および3ヶ月成績)
論文審査委員	教授 佐野 俊二 教授 梶谷 文彦 教授 榎野 博史

#### 学位論文内容の要旨

分岐部病変に対する経皮的冠動脈形成術は、それ以外の病変の治療と比較して成功率が低く、合併症の頻度も少なくない。現在、分岐部病変に対する、最良のデバイスおよび治療方法は、確立されてない。我々は、連続 87 病変の分岐部病変に対する従来の balloon による冠動脈形成術 (PTCA 群) および Cutting Balloon による冠動脈形成術 (CBA 群) で治療した (CBA 群 : 50、PTCA 群 : 37) 直後および 3 ヶ月の成績を比較検討した。定量的冠動脈造影を用いて解析し、また 3 ヶ月後の冠動脈造影は、93% で可能であった。初期成功は、CBA 群 92%、PTCA 群 76% と有意差を認め、院内主要合併症は、CBA 群 2 例、PTCA 群 6 例認めた。緊急のステント植え込み術は、有意に CBA 群で低かった。3 ヶ月後の再狭窄は、CBA 群 40%、PTCA 群 67% と有意差を認め、follow-up 期間内のイベントは、両群間に有意差は認めなかった。結論は、分岐部病変に対する Cutting Balloon を使用した場合、従来の balloon と比較して、初期成功率が高く、再狭窄は低率であった。この結果、分岐部病変に対する Cutting Balloon の使用は、望ましい治療と考えられた。

#### 論文審査結果の要旨

本研究は Cutting Balloon による分岐部病変に対する経皮的冠動脈形成術の有効性を報告したものである。分岐部の病変に対する Cutting Balloon 形成術の長期予後の検討を行った初めての論文であり、価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。